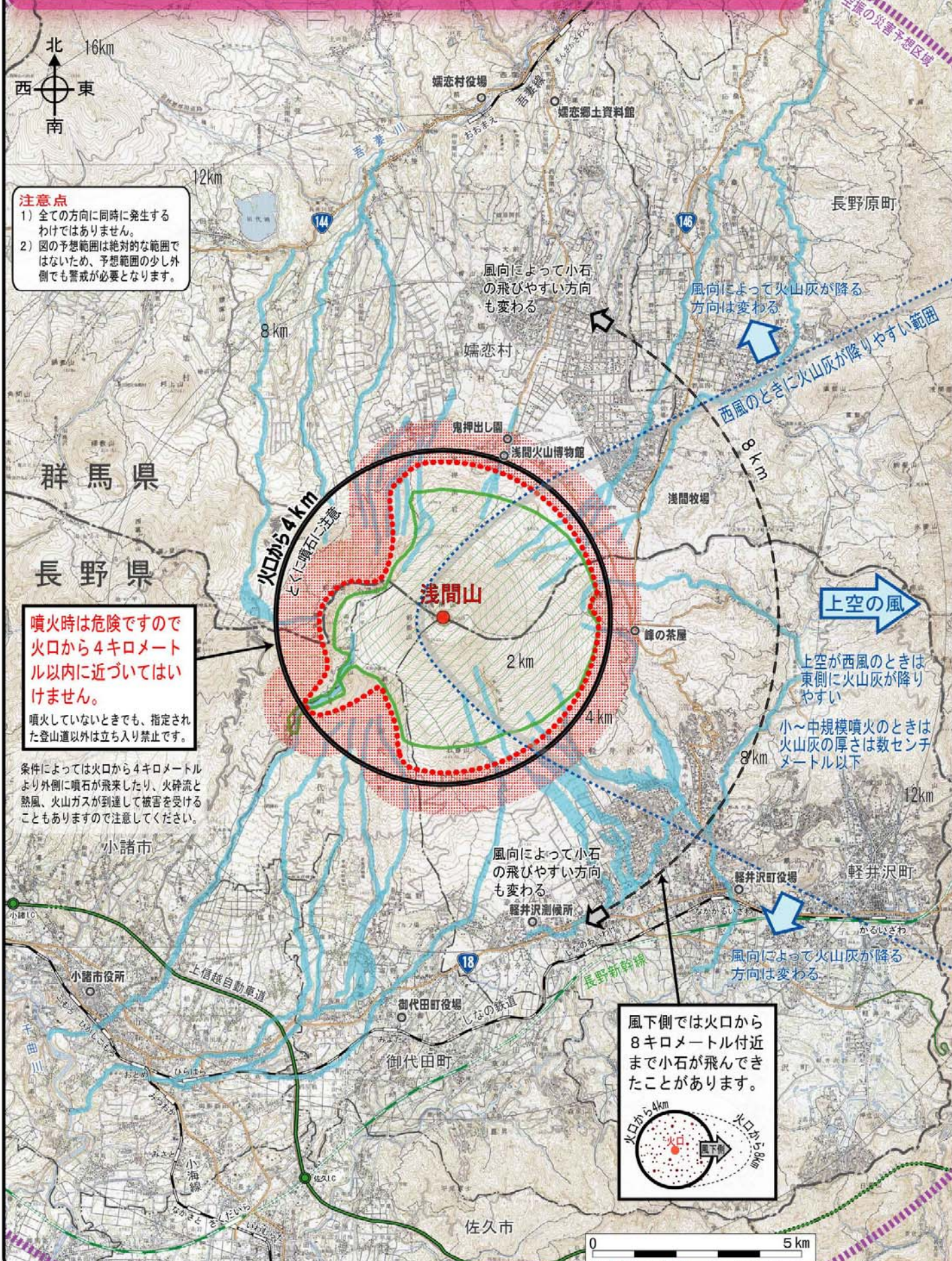


火山災害予想区域図 小～中規模噴火の場合

(火山ハザードマップ)

最近100年間に発生した規模の噴火



注意点
 1) 全ての方向に同時に発生するわけではありません。
 2) 図の予想範囲は絶対的な範囲ではないため、予想範囲の少し外側でも警戒が必要となります。

噴火時は危険ですので火口から4キロメートル以内に近づいてはいけません。
 噴火していないときでも、指定された登山道以外は立ち入り禁止です。

条件によっては火口から4キロメートルより外側に噴石が飛来したり、火砕流と熱風、火山ガスが到達して被害を受けることもありますので注意してください。

風下側では火口から8キロメートル付近まで小石が飛んできたことがあります。

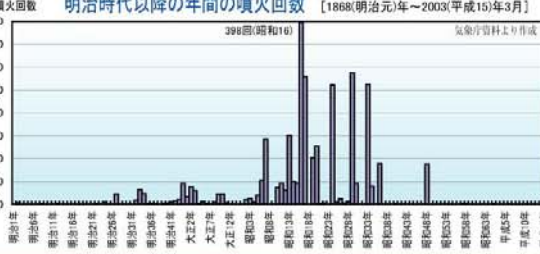
記号の色と意味	想定火山ガス	噴石	空振	火山灰(降灰)	降雨時の土石流融雪型火山泥流	火砕流と熱風
● 浅間山の山頂火口	高濃度にガスが溜まりやすい予想範囲	実線: 火口より大きい噴石が飛んでくる予想範囲(4km) 破線: 風下側で小石が飛んでくる予想範囲(8km)	空振による被害を受ける予想範囲(18km)	風下側に火山灰が降下	降雨時の土石流と積雪期の融雪型火山泥流の流下予想範囲	火口から半径4km以内(熱風はそれ外側にも広がる)

最近100年間の噴火の特徴

浅間山は、最近20～30年間は比較的静かな状態が続いています。しかし、明治時代から昭和30年代にかけて、ひんぱんに噴火を繰り返していました。この時期の噴火では、火山灰や噴石、空振、ときには小規模な火砕流などの現象が発生しました。これらの噴火で亡くなった方は、すべて火口から4キロメートル程度以内の範囲にいた登山者でした。浅間山のこのような過去の噴火の経緯から、下のグラフのように、噴火がひんぱんにおこる時期と静穏な時期を繰り返していると考えられます。



浅間山の小規模な噴火の写真。噴煙とともに小規模な火砕流が発生し斜面に沿って流れました。1973(昭和48)年2月6日撮影



最近100年間の噴火写真



浅間山爆発
 森にも道にも厚い灰
 窓ガラス次々割れる
 降雨のように火山弾
 視

1973(昭和48)年2月1日の噴火を伝える新聞記事(朝日新聞) 火口から約7キロメートルの地点で小石が降って被害がでました。



火山活動に関する情報 (気象庁の発表する情報)

最新の火山情報及び火山活動度レベルは、気象庁のホームページ (<http://www.jma.go.jp/>) でご覧になれます。

火山情報 火山情報は、気象庁から発表されて、報道機関(テレビ、ラジオ、新聞)やインターネットなどを通じて、住民や観光客の皆さんに伝達されます。

緊急火山情報 生命、身体にかかわる火山活動が発生した場合、あるいはそのおそれがある場合に随時発表

臨時火山情報 火山活動に異常が発生し、注意が必要となるときに随時発表

火山観測情報 緊急火山情報、臨時火山情報を補う場合や、火山活動に変化があった場合などに発表

火山活動解説資料 浅間山の火山活動の状況は、気象庁火山監視・情報センターから毎月「火山活動解説資料」として公表されています。火山活動解説資料は気象庁のホームページでもご覧になれます。軽井沢測候所では地元の防災機関等に対して、火山監視・情報センターが発表する火山情報等の解説や火山防災対策への助言など必要な情報提供が行われています。

活火山と静火山 火山噴火予知連絡会(事務局:気象庁)では、活火山の定義を「おおむね過去1万年以内に噴出した火山および現在活発な噴火活動のある火山」としています。この定義をもとに、日本の活火山は浅間山を含む108火山が選ばれています(2003年1月)。

活火山のランク分け さらに、火山噴火予知連絡会では、活火山について火山活動度の分類(ランク分け)を行い、108の活火山をAからCまで3つのランクに分けています。浅間山は、この中で最も活動度の高いAランクに分類されています(2003年1月)。なお、これらの分類は過去の噴火活動などを参考に決めたものです。A～Cのランク分けは噴火への目安を示したものではありません。

[Aランクに分類されている13火山]
 十勝岳、博多山、有珠山、北海道駒ヶ岳、浅間山、伊豆大島、三宅島、伊豆鳥島、阿蘇山、雲仙岳、桜島、霧島、御嶽、御訪之瀧島

浅間山の火山活動度レベル

レベル	火山の状態	噴火の形態	過去事例
5	広範囲まで及び大規模噴火が発生または可能性 ・遠方まで火砕流または溶岩流が到達して広域に影響するような大規模噴火が発生。 または 上記のような噴火の可能性がある。	山麓まで噴出物が降下、溶岩流の流出、火砕流の発生による被害の発生。	・天仁、天明の大噴火(山麓まで火砕流、岩屑なだれ)
4	山麓まで及び中～大規模噴火が発生または可能性 ・遠方まで噴石が飛散、あるいは火砕流または溶岩流など、居住地まで影響するような中～大規模噴火が発生。 または 上記のような噴火の可能性がある。	山頂火口から3km以内、山麓まで噴出物降下、空振の影響の可能性もある。小規模の火砕流もあり得る。	・1950年9月23日の噴火(火口から8km以上離れた場所に噴石) ・1973年の噴火
3	山頂火口で小～中規模噴火が発生または可能性 ・小～中規模噴火が発生。 または 地震が頻発したり火砕・噴動が観測されるなど小～中規模噴火の発生の可能性もある。	山頂火口から2～3km程度以内まで、噴石を飛散したりごく小規模な火砕流を伴う噴火もあり得る。	・1983年4月8日の噴火(空振で山麓のガラス等に被害) ・2000年9月、2002年6月の地震群発
2	やや活発な火山活動 ・噴煙がやや多くなったり、火山性地震が多発、微動が発生するなど火山活動がやや活発である。 火山性ガスの顕著な放出や微小な噴火(火山灰の放出など)があり得る。	山頂火口付近に微量の火山灰の噴出もあり得る。	・2002年5月以降の噴煙活動の活発化、火口の温度上昇 ・1990年、2003年の噴火
1	静穏な火山活動 ・噴煙は比較的少なく、火山性地震の群発が頻発するもののその規模は小さく、火山性微動の発生も少ない。	噴火可能性低い	静穏な活動期のほとんど
0	長期間火山の活動の兆候なし ・噴煙がなく、火山性地震・微動もほとんど発生しない。	噴火可能性なし	—

この防災マップとの対比

大規模噴火
中～小規模噴火
静穏な活動期

影響範囲は山頂付近のみであり、この防災マップでは噴石や火砕流の到達範囲を記載していません。